

現代文授業における多読

—教科書教材を生かす—

An Extensive Reading in the Contemporary Japanese Language
: Utilization of Works in the Textbook

井上 次夫
Tsugio INOUE

概要：

通常、高専では高校と同様に精読式授業が行われている。しかし、近年、「ゆとり教育」の申し子たちが入学してきており、従来の精読式授業を続けるだけでは彼らへの対応が難しくなっている。そこで、今後の国語授業においては精読式授業に加え、新たに多読式の授業を導入し、その有効性が検証されなければならないと考える。

本研究では高専2年生を対象とし、国語の授業内における多読を試みた。しかし、対象図書、時間等を外国語教育の場合のように個人のレベル、好みに応じて個人に一任することはせず、指導者が国語教科書掲載の教材に限定することとした。その理由の第1は、教科書の有効活用を図るためである。授業で扱われずに終わってしまう多くの教科書教材に幅広く触れることで学生の興味・関心を広げさせることが可能となる。理由の第2は、学生に繰り返しの多読を強いることで読書習慣を身に付けさせるためである。この結果、学生の自主的読書が見られ始め、全体としては学習意欲の向上が見られた。一方で、学生の多読に適する教材選別の必要という問題が指摘された。また、多読式授業の早い進度に追いつけない学生の出現という問題が見られた。今後、それらの問題を考慮しつつ多読の視点を重視する学習指導を推進していくことが重要である。

Abstract:

The purpose of this paper is to encourage the practice of extensive reading for the Japanese language classes in the technical college. I attempted to provide the students with plenty of teaching materials from their textbooks only. There are two reasons for doing this. First, the students can spread their concern by reading all the teaching materials. Second, the students can acquire the habit of reading by repeatedly all the teaching materials. As a result, the students will be able to read books independently. Consequently, they will improve their attitudes toward reading. However, it soon became clear that it was necessary to select the teaching materials that were suitable for the students in order that they could read books extensively.

Therefore, although the idea of extensive reading should be seriously considered, from now on, it is necessary to examine which teaching materials in the textbooks are suitable for the students.

KEYWORDS: extensive reading, contemporary Japanese language, teaching material

1. はじめに

一般に理系の高校生、高専の学生は、実際の能力とは別に国語に対する苦手意識が強いと言われる。事実、筆者が小山工業高等専門学校の新入生を対象に行った調査によると、中学校時代に国語を得意としていた者はわずか4%弱であるのに対し、不得意としていた者は40%強に達している¹⁾。このような国語に対する苦手意識が高専入学以後の国語の授業で時として見受けられる学生の学習意欲の減退、読解力の不足、そして読書嫌い等の一因となっているのではないだろうか。

そこで、従来の国語の授業で行われてきた精読式授業と対置される多読式授業の導入について検討する必要と意義が認められる。いわゆる多読は、読書速度を伸ばし文章読解力を付けさせる、ひいては読書意欲を向上させると言われている。本稿では、高専2年生を対象とする現代文の授業における教科書教材の多読を取り上げ、教科書教材の多読を国語の授業の中に位置付けた多読式授業の実践例を示し、その方法と効果について考察を行う。

2. 多読と精読

2-1 多読の定義

一般に、多読とは「本を数多く読むこと」(新明解国語辞典6版)である。これを英語教育においてみると、多読とは「文字通り『多くの英語を読むこと』であり、リーディングによる大量のインプットを狙ったもの」(寺西・松浦2004)、また「文章を通して筆者が伝えようと意図している意味・内容を汲み取る活動、つまり内容指向の読みをなるべく大量に行うこと」(梅村2003)等とされている。

一方、国語教育における多読についてみると、例えば、庭野(1997:21)では多読には、

- (1) 作品全体の通読を多くする。
- (2) 教科書教材と関係する他の文章を読む。

という2つの形態があるとしている。前者は1つの作品、1つの文章についてそれを読む回数が増える多読であり、後者は当該教材以外の他の作品や文章を読む回数が増える多読である。そして、庭野は「どちらの多読も、これからの読みの授業の改革のキーワードになる」と述べている。

以上を踏まえ、本稿では教科書に掲載された教材を幅広く活用するという観点から対象を教科書教材に限定した上で、「多読」を次のように定義する。

- (1) 1つの教科書教材を繰り返し多くの回数読むこと。
- (2) 数多くの種類の教科書教材を読むこと。

すなわち、(1)は「同一教材の反復通読による多読」をいうのであり、(2)は「多教材の通読による多読」をいうのである。この2種の方式による多読を併用することにより、学習者は読解力が付くとともに、読書速度が伸び、その結果、読書意欲も向上していくものと考ええる。なお、實際上、(2)の多数教材を通読する多読においても、(1)の「同一教材の反復通読による多読」を行うことが多い。

2-2 多読と精読

多読(extensive reading)とは、精読(intensive reading)と対置される「読み方」の1つである。ここでは最初に、第2言語教育(英語教育・日本語教育)における多読指導について概観し、その後、国語教育における多読指導について考察を行う。

まず、英語教育において、横森(2000)は多読式授業の実践から、「多読によって、読解力、語彙力、読解スピードが伸びるだけでなく、英文を読もうとする意欲が高まる」と述べる。また、塩澤(1994)は多読の意義として、生徒が求めている読解力及びコミュニケーションのための読解力の獲得、内容理解のための読解過程の習得を挙げている。さらに、島他(2000)は多読による読解力の向上、英語学習に対する態度・意欲の変容について肯定的に検証している。以上からだけでも明らかなように、多読は英語教育においてその効果が大きく認められているのである。

さて、表1に英語教育における精読法と多読法について比較・整理したものを掲げる。これは、両者のどちらかの優劣を示そうとするものではなく、双方の特色を理解するためのものである。

次に、多読を日本語教育においてみると、梅村(2003)は経験則と断った上で、多読の意義として次の3点を挙げている。

- (1) 文意を素早く正確に把握することができる。
- (2) 日本語による読書習慣が身に付けられる。
- (3) 教室以外で多量の日本語に触れられる。

また、江田他(2005)は中・上級の日本語学習者に対して短編小説を多読させた授業において「読解力が伸び、読みに対する意識が肯定的に変化し、(中略)未知語の処理では、類推・推測を、読解のストラテジーでは、『楽しんで読む』『大体でいいから内容を理解する』という読み方を身につけつつある」と報告している。

以上のことから、第2言語教育における多読とは、次のような性格のものであることがわかる。

表1 英語教育における精読と多読の比較

	精 読 法	多 読 法
学習スタイル	教師中心	学習者中心
場面	教室内	教室の内外
達成目標	正確な読解力	読書速度アップ
目的	和訳、細部理解、問題解答を行う	情報、中心思想、楽しみを得る
教材	教師が選択、ときどき難しい	学習者が選択、易しい
分量(頁数)	多くない	多い
速度	遅い	速い
方法	最後まで読む、辞書活用	途中まででも可、辞書使用は任意
読後の活動	多くの問題	少ない課題

(横森 2000 が示した図 1 をもとに筆者が作成)

- (1) 対象：学習者の能力と関心・興味に合った読み物。
- (2) 方法：なるべく辞書を引かせず、易しいものから段階的に、速いスピードで。
- (3) 分量：可能な限り大量。

その結果としては、学習者に読解力を付けさせ伸ばす効果、及び読書習慣を身に付けさせる効果のあることが実証されていると言える。

最後に、国語教育における多読式授業の意義について精読式授業との比較からみておく。

前掲の庭野(1997)によると、小学校の場合、従来から行われている国語科の授業法、つまり、場面や段落に分けて時間ごとに教材文の特定の箇所の精読を中心に行う「一教材多時間配当の授業(庭野 1997)」には次のような弊害が生まれているという。

- (1) 全文通読の学習活動が少ない授業になる。この結果、第1次の導入時と第3次のまとめの時間だけの全文通読になる。
- (2) 速読を鍛える学習活動が組めない授業になる。この結果、丁寧に読むことだけが重視される。
- (3) 読解授業でありながら、指導者と学習者の問答が中心になる。この結果、学習者自身が全文を読み通すことが少ない。
- (4) 時数を消化するために余計な学習活動が増える。この結果、読むことの学習量が少ない。

これに対し、教材の全文通読を繰り返し行う多読式授業では、丁寧な読みからくるマンネリ化からの脱却、速読技術の向上、自ら進んで本を読む学習者の育成等が期待できるという²⁾。

以上のことから、国語科においても精読一辺倒の授業ではなく、適時に多読を取り入れた授業を展開することの必要性が指摘できる。しかし、中学校・高等学校段階における多読の実践は、教科書教材の発展としての読書指導が主流である。また、図書館との連携による読書指導や感想文の書き方の指導を目的とするため、多読式授業の実践はほとんど行われていないのが現状であると思われる。

3. 多読と速読・黙読

3-1 多読と速読

多読により培われるとされる能力の1つに「読解力」がある。英語教育の場合、読解力を判定する指標として「読書速度wpm(words per minute)」と「理解度」を組み合わせた「読解率(WPM)」が用いられる。その算出式は次の通りである。

$$\text{読解率(WPM)} = (\text{語数} / \text{読破時間(分)}) \times (\text{正答数} / \text{設問数})$$

一方、国語教育における「読解力」とは、従来、文章の精細な読み取りができる能力の意味で用いられてきた³⁾。また、「速読」とは「理解度を落とさずに速く読むこと」(国語教育辞典2001)とされる。この「速読」はつまり「理解度」と「読書速度」の双方を兼ね備えたものであることから、速読の能力すなわち「速読力」とは、英語教育における「読解率(WPM)」に相当するものと考えられる。そして、一般に、多読は読書速度を上げさせ、理解度を向上させるものであるから、「速読力」は多読により習得される能力の1つであると言える。この意味において、能力の問題である「速読力」と単に読書速度の問題である「走り読み」や「早読み」とは別物として明確に区別しておく必要があるだろう。

さて、日本語の場合、上述の「読書速度」は次式により求められる。

$$\text{読書速度(分速)} = \text{総字数} \div \text{所要時間(秒)} \times 60$$

読書速度の発達を示した表2によれば、小学校から中学校でおよそ分速400字から600字程度であることが分かる。また、佐藤(1988:5)は、「小説や物語を読む速さは、ふつうの人で1分間に500字から700字くらい、おそい人だと300字くらい(中略)1000字以上なら、これはもう速い部類」だと述べている。

表2 読書速度の発達(大綱)

学年	小学3年			小学5年			中学1年		
文種	男	女	計	男	女	計	男	女	計
物語文	391	440	414	454	472	462	579	615	593
説明文	407	425	415	442	465	451	596	595	596

[注]数値は1分間の読字数の平均 (佐藤1988:71より)

ところで、上の読書速度(分速)を求める式のうち、「総字数」とは仮名であれ、漢字であれ、要するに原稿用紙のマス目1つ分を1字と数える。従って、通常、表音文字である仮名よりも表意文字である漢字の使用が多ければ多いほど総字数は少なくなり、読書速度も速くなることになる。一方で、漢字が多くなれば多くなるほど漢字力が劣る場合、その分だけ読書速度は遅くなるだろう。このようなことからすれば、仮名と漢字の各字数を示すことが必要となり、同時にその質と割合が問題となってもくるだろう。他方、単なる字数ではなく単語数、文節数を基準とする考え方が当然出てこようが、英語のように分かち書きされる言語ならば語数は客観的に捉えやすい。これに対し、日本語の場合、そもそも単語、文節といった文法的単位の認定には諸説があり、仮に学校文法に従うとしても、それが読書速度を求める際に果たして妥当な単位であるかについては検証が必要となるであろう⁴⁾。

次に、速読における「理解度」の測定について考える。今、例えば、かつて増田(1955)が行った読みの速度と読解力の調査をみると、小学校6年生の1分間の平均読字率は553字(文章920字うち漢字95字)であり、読字数と読解力は概ね関係があるが、例外もあると結論されている。しかし、小学6年の最高読字数が920字/分とあるのは、国立国語研究所(1964)の最高読字数819字/分及び筆者の追試結果と比べても異常に高く疑問が残る速さである。また、読解力がどのような設問内容で、どのように測定されたのかについて具体的に示されていない。

これに対し、佐藤(1988)は、短い文章を読んで内容に関する設問(3択)に答えるのに要した時間とその正答率から「修正読書時間」を求める速読テストを実施する一方で、長い文章を読んでその読書速度とその後に解答した内容に関する設問(3択または4択)の正答率等を用いて読書速度と理解度の関係を具体的に考察している。その結果、読書速度と理解度には相関関係が見られないことを明らかにした。すなわち、読書速度が速ければ理解度が低いまたは高い、あるいは読書速度が遅ければ理解度が高いまたは低いといったことは言えないというのである。なお、両者の関係について言えば、(ア)読書速度・理解度がともによくないタイプ、(イ)理解度は高いが読書速度が遅いタイプ、(ウ)読書速度は速いが理解度が低い

タイプ、には改善すべき課題があるとしている。

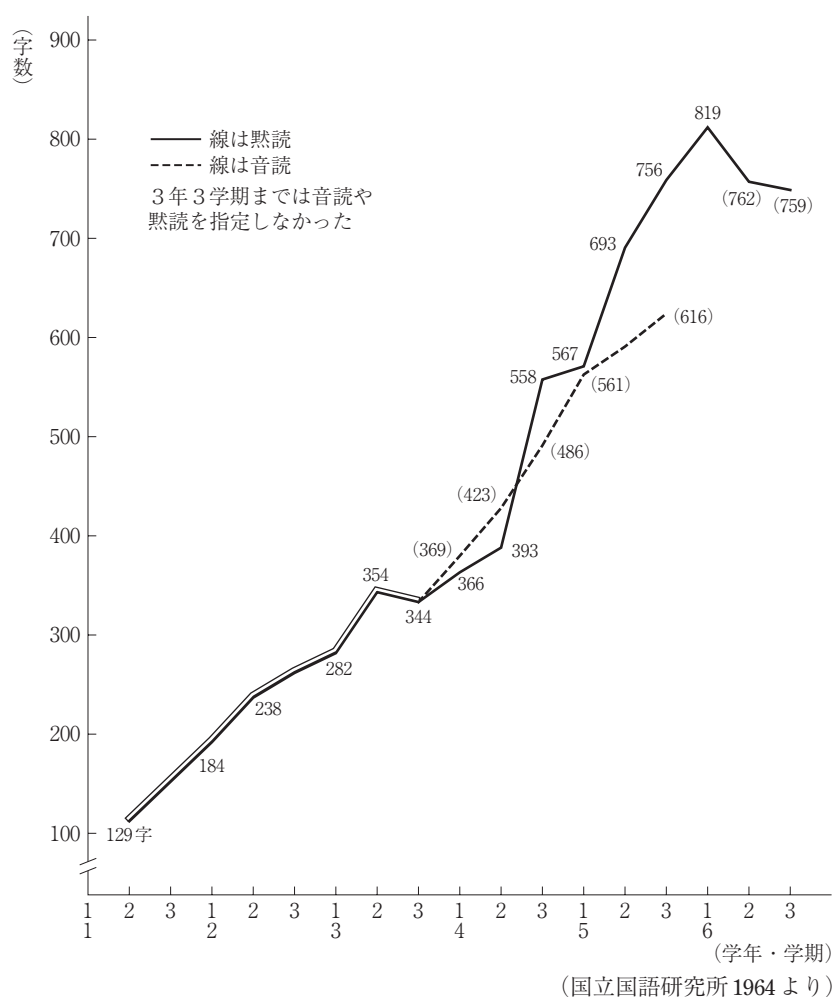
このようなことから、今後、国語教育においては、従来の理解中心の指導に加えて効率的に文章を読ませる指導、読書速度を上げさせる指導にも配慮する必要があると言えるだろう。また、多読がどの程度まで「読書速度」の向上に効果があるかについて実証的に示すことは今後の課題である。

3-2 多読と黙読

英語教育の塩澤(1994)は、多読は多量の精読ではない、多読には精読と異なる技能が必要だとして4つの技能を挙げているが⁵⁾、その第1は黙読であるという。確かに、黙読は多読の最も基本的な技能であると言える。黙読は文字を音声化しない点において音読と異なる。黙読は視覚により大量の文字情報を素早く効率的に把握することができるため、黙読は速読にとって不可欠な技能の1つなのである。

国立国語研究所(1964)には、音読による場合と黙読による場合では、どちらが速く正確に読めるかを調査した結果が報告されている。それによると、小学校5年生の3学期において読みのスピードに加えて理解の正確さでも黙読が音読に勝るようになるという(図1参照)。このことを府川(2001)は、学習指導要領の記述と結び付け、「文章内容を理解するために、声を出しながら読むのは、小学校4年生くらいまでで、それ以降は黙読を中心にして内容理解を図るというのが、[平成元年版]学習指導要領[まで]の基本的な考えだった」と述べている。教師は学習者の発達段階を考慮する必要があることに留意しなければならないのである。ただし、高等学校及び高専段階における難解な現代文読解や古典の読解の場合等に関しては音読の効果も予測されるのであり、その点については別途検討すべき課題である。

図1 1分間の最高読字数の発達



なお、次節で述べる高専国語の現代文における多読式授業においてはその黙読時間の十分な確保を行うこととしている。なぜなら、黙読の技能に支えられる多読が読書速度を上げさせ、読解力を付けさせ、ひいては読書習慣を身に付けさせると考えるからである。

4. 現代文授業における多読

従来、小学校から中学校の国語、そして高等学校の現代文の授業は精読を中心として行われてきた。しかし、現行高等学校学習指導要領(平成11年3月29日告示)では「現代文」の目標をまず「近代以降のさまざまな文章を読む能力を高める」とし、内容の取り扱いについては「生徒の読書意欲を喚起し、読書力を高めるように配慮する」としている。これらのことを達成するには、限定された授業時数の中で限定された文章を深く読もうとする精読だけでは不十分であると言わざるを得ないのが現状であろう。従って、国語授業への多読法の導入がもはや不可欠であることは既に述べたところでもある。以下、高専国語の現代文授業における授業内多読の実践的試みの例を示し、検証を行う。

4-1 多読式授業の実践

使用教科書は教育出版の「現代文」、教材はその中の9教材、実施時期・授業時間数は2005年度後期中間試験後の12月中旬から2006年2月上旬までの計20時間⁶⁾、対象クラス・学生は小山高専2年生3クラス(機械M、電気情報E、物質Cの各工学科)計120名である。授業で扱った9教材の題名と頁数、教師用『教授資料』における配当授業時数、実施授業数を表3に示す。

表3 教材名、頁数、配当時数、実施時数

	教材名(作者・筆者、ジャンル)	頁 数(p)	配当時数(h)	実施時数(h)
1	雀こ(太宰治、小説)	7	3	1
2	知識の扉(港千尋、随筆)	6	3	1
3	蠅(横光利一、小説)	10	5	1.5
4	共生への冒険(井上達夫、評論)	6	5	1.5
5	なぜ過去を知るのか(溪内謙、評論)	7	5	1
6	未来のいのち(原田正純、評論)	6	5	1.5
7	機械と人間(中岡哲郎、評論)	9	5	1.5
8	マルジャーナの知恵(岩井克人、評論)	5	4	1.5
9	こころ(夏目漱石、小説)	22	10	9.5
	合計	78	45	20

通常の精読式授業では実施時数が配当時数を上回るのが一般的状況であると思われるのに対し、この多読式授業では漱石「こころ」を除く8教材において実施時数が配当時数より大幅に少なくなっている。例えば、この多読式授業では教科書78頁分の授業配当時数は精読式授業の場合45時間であるのに対し、実際にはその半分以上の時数の20時間で授業を終えているのである。どのような授業によりこのようなことが可能になったのであろうか。単に教材本文を通読させ、感想を書かせて終わったのであろうか。以下に、実際の授業展開について具体的に述べる。

まず、後期中間試験後(12月初旬)の最初の国語の時間に、今後扱う予定の教科書教材を学生に予告し、それら本文の通読及び内容問題プリント⁷⁾の解答を予習として課す。そして、以後の授業は学生がその予習を行っていることを前提として進める、1つの教材を通じて通算10回以上読むべきことを説明し、その周知徹底を図る。

以後の授業では、基本的に次のように展開した。

- (1) 学生に本文の1形式段落を目安に順次、リレー式に音読させていく。なお、教材の種類に応じて事前に、例えば、難読と思われる漢字の読みを網羅的に示す(例「知識の扉」)、教材のすべての脚注を通して音読させ解説を加える(例「未来のいのち」)、副教材の音声CDを聴かせる(例「雀こ」)、題名読みを行う(例「共生への冒険」)、本文以前の省略部分を紹介する(例「こころ」)等の教材に応じた導入を適宜行い、その後に音読に入る。
- (2) 学生に1形式段落毎のリレー音読をさせた後、学生個人による全文再読(通読)のために黙読の時間(目安10数分)を取る。この時、教師自身も同時に教材の最初から黙読に入る。この時間は、経験上、教室内にシーンと張りつめた静寂が生まれる。その静寂を大切にするために教師から学生への指示や注意等の働きかけは一切行わない。
- (3) そして教師が黙読終了後、しばらくの間(目安3分)、学生の様子を観察する。ほとんどの学生が一通り読み終わったのを見計らい、事前に課題として配付しておいた内容問題プリントの解答に入る。

内容問題例

「知識の扉」(表3-2)

本文の内容と一致するものとして最も適当なものを次のア～オの中から1つ選び、記号で答えなさい。〈選択肢は略〉

「共生への冒険」(表3-4)

民主主義とリベラリズムのあるべき関係が述べられている1文を抜き出し、その最初の5字を書きなさい。

「未来のいのち」(表3-6)

「二十世紀の最大の『負の遺産』の1つに水俣病がある。」とあるが、ここから私たちは何を学ぶべきだと筆者は述べているか。2点に分けて分かりやすく述べなさい。

「機械と人間」(表3-7)

「労働は自己を対象化する行為である」とはどういうことか。それらを説明した次の文の空欄に、指定された字数の適切な語句を本文中から探して埋め、説明を完成させなさい。〈以下略〉

- (4) その場で、解答に必要な人数分を指名する。なお、教師は指名した学生名をメモしておき、学生ができるだけ均等に指名されるように留意する。また、指名後のしばらくの間(目安5分)は学生同士が解答について相談することを認めることにしておく。机間巡視を行う。
- (5) その後、通常はプリントの解答を板書させる。一方、授業の残り時間が少ない場合は口頭により発表させ、順次解答させていく。内容問題の多くは選択式(○×式、4択・5択式)であるが、教材によっては穴埋め式、抜き出し式、記述式問題等も含む。なお、正答・誤答に関わらず学生にはその理由、根拠を必ず尋ねて答えさせる。
- (6) その上で、他の学生に解答に異論がないかを口頭で確認し、異論・質問があれば質疑応答を行う。それから、教師が解答を行い、解答への考え方や簡単な解説を加えて内容理解を促す。その後、学生からの質問を改めて受け付け、再度、質疑応答の時間とする。
- (7) 最後に、教材の内容に関するコメント(主に意見)をプリントの最後に設けてある箇所に数行(3～5行程度)書かせる。時間があればそれを学生に口頭で発表させる。それから、復習として家庭で本文の通読を再度行うように指示し、次時の予告を行う。なお、コメントと内容問題プリントは4つの教材の授業終了毎に提出させ、解答状況及びコメントの記入状況の点検を行うことにより、学生の学習状況を把握することとした。

ここまでの1時間で実施教材の1、2、5(表3参照)の実際の授業展開である。一方、1.5時間で実施教材の3、4、6、7、8(表3参照)の場合、後の0.5時間は教師による本文の内容についての解説、再度の学生による質疑応答、意見交換の時間とする。この時、経験上、学生の質疑、意見が引き出せると学習内

容が一段と深まると言える。

以上に示したこれら一連の活動が授業内多読の基本パターンである。学生は、少なくとも予習で1回、授業内に音読と黙読の2回、復習で1回、計4回は全文を自分自身で通読することになる。さらに、定期試験では一部、出題本文を全く省略した内容中心の設問だけによる出題(例「教科書本文の内容を思い出して、次の各問いに答えよ。」等)を行うこととしたため、学生は家庭でさらに本文を暗記するほどの反復通読を重ねる必要に迫られた。

4-2 結果・考察

多読式授業は学生の読解力、態度・意欲にどのような変化・影響をもたらしたのであろうか。

まず、学生の読解力の変化について検討しよう。ここでは、①精読式授業を行った前期の中間試験⁸⁾、②1月実施の実力テスト(現代文分野、マークシート方式)、③多読式授業を行った学年末試験の平均点を順に示すと、次の通りであった。

M科	①65.7	→	②53.2	→	③72.9
E科	①61.9	→	②57.4	→	③72.8
C科	①61.5	→	②49.5	→	③74.5

確かに平均点は多読式授業を行った③の結果が相対的に高くなっているが、各試験の難易度には差があり、設問方式も異なる。このため、上の結果だけで多読式授業により読解力が向上したと即断することは許されない。従って、多読式授業による文章の読解力・理解力の定義、その測定法と検証、さらに読書速度の向上等については今後の課題とせざるを得ない⁹⁾。

では、多読式授業による学生の態度・意欲の変容についてはどうであったろうか。以下、学年末に学生に対して行った多読式授業に関する記述式アンケートの回答コメントを材料として、学習者の態度・意欲の変容について整理する。

〔多読式授業による効果〕

(1) 内容理解の深化

文章を何回も繰り返し読むため、読めば読むほど自然と内容理解が深まる。難しい文章に対して何度も読むので読解力も付き、内容に対して自分なりの考えが持てるようになる。

(2) 読み方の変化

あまり細部の内容にこだわらず読み進めるため、文章全体の内容がつかめるようになる。一気に速読したほうが分かりやすい種類の文章があることに気付く。

(3) 内容の広がり

多くの著者のさまざまな文章に触れることで、さまざまな考え方や多くの情報が得られ、文章を読むことに面白味が感じられるようになる。

(4) 学習意欲の向上

多くの文章を次々に読んでいくため、1回毎の授業に新鮮味があり、従来ありがちだった授業へのマンネリや飽きもこず、学習意欲を保つことができる。

(5) 読書意欲の向上

文章を読むスピードが速くなったように感じられる。また、文章が気楽に読めるので、本を読むことが苦痛ではなくなり、読書の楽しみが味わえるようになる。

〔多読式授業の問題点〕

(1) 内容の理解不足

授業の進度がとても速く、読んだ文章も種類も多いため、内容理解が不十分のまま授業が終わりがちである。授業内で十分に内容が消化できないことがある。

(2) 教材選別の必要

文学的文章や内容が難解な文章については従来のように授業で精読しなければ、内容が十分には理解しにくい。じっくり読んで十分に理解することが難しい。

(3) 学習者の負担増

家庭で予習・復習をしなければ授業内容が理解しにくくなるため、多読は精読に比べ家庭学習時間を多く必要とし、学習者の負担が増える。

多読式授業では、文章を通算10回以上繰り返し読むことにより内容理解が深まる、一気に読むことにより文章全体の要旨を把握できる、多くの文章に触れることにより内容に興味を持ち、新鮮な気持ちで学習意欲が続く、読書意欲が刺激される等の効果が期待できると言える。

しかし、同時に問題点も指摘される。まず、多読の対象となる文章は原則として教科書に掲載されているもの、つまり教科書教材としたが、今後、教材選定には慎重な配慮が必要である。目の前の学生に適する文章であるかという観点を忘れてはならない。そのためには、文章のジャンル、分量の多寡、難易度、内容等にはしっかりと目を配る必要がある。この点からは、場合により教科書教材以外の文章を取り入れることも検討しなければならないだろう。すなわち、多読専用の副読本を独自に作成することも視野に入れて検討しなければならない。

一方、授業展開についてみると、基本となる展開パターン中の「質疑応答」の議論(4-1、(6)参照)を充実させることが課題である。他者の読みと自分の読みを比較し、それが刺激となって新たな疑問・意見を持ち、読みを深化させ、発展させる契機となるからである。なお、評論教材の内容については発展として小論文の題材として活用することも可能である。

5. おわりに

本稿では、現代文の授業において教科書教材の多読を導入することの必要性和意義について述べ、実践的試みの例を示し考察を加えた。

しかし、今後には、多読式授業法の導入時期・タイミング・適切な教材選択、年間指導計画における精読式授業と多読式授業のバランス・配置、多読式授業の展開法についての改善・工夫、多読式授業による学習効果(特に読書速度・読解力の向上)についての客観的検証、国語の授業外における多読と読書指導、そして感想文・意見文の書き方指導との連携といった数多くの取り組まなければならない課題が残されている。

注

- 1) 高専入学時に学生が提出した個人調書2クラス(2001年度入学電子制御工学科43名、2004年度入学物質工学科40名)計83名分の中学校での得意・不得意科目欄の回答について調査した。この欄への記入は任意で、得意・不得意については自己判断によるものである。従って、1科目だけ記入した場合や複数の科目を記入した場合、また、片方または両方未記入で空白の場合もある。
- 2) 庭野(1997)は多読の必要性和効果を主張するが、学習者の反応や効果のデータについては十分に提示していない憾みがある。なお、教材の全文通読は多く家庭学習として課せられているのが実態ではないか。
- 3) 近年はPISA調査における読解力、すなわち「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、

効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」を指向する傾向も見られるが、このことについては別の機会に論じたい。

- 4) 庭野(1997:137)は「お母さんの木」(大川悦夫)の黙読所要時間(分)を示すのみで、読書速度その他の情報が示されていない。
- 5) 英語の多読においては、黙読、直読直解、フレーズ・リーディング、パラグラフ・リーディングという4技能が必要だとする。
- 6) 筆者が担当した2年生国語(3単位)においては、前期中間試験まで現代文授業、前期期末試験まで古文授業、後期中間試験まで漢文授業、後期期末試験まで現代文授業を実施した。
- 7) 教科書傍用準拠問題集を素材に筆者が作成した。内容読解に関する選択式問題を中心に、抜粋問題や記述式問題を入れ、学生による教材内容へのコメント欄等を入れて構成したもの。
- 8) 前期中間試験までの現代文の授業では、教科書教材「考えることのおもしろさ」(西研、随筆)、「山月記」(中島敦、小説)について精読法による授業をそれぞれ5時間、10時間で行った。
- 9) 今回は多読式授業の導入とその試行に主眼があったため実施できなかったが、今後は、精読式授業クラスを統制群とし、多読式授業クラスを実験群とした比較研究が必要である。

引用・参考文献

- 1) 梅村修：日本語教育における読解指導—extensive readingの試み、pp.173-182、留学生教育8(2003)
- 2) 江田すみれ他：中・上級の学習者に対する短編小説を使った多読授業の実践、pp.74-83、日本語教育126(2005)
- 3) 国立教育政策研究所：生きるための知識と技能OECD生徒の学習到達度調査(PISA)2000年調査国際結果報告書、ぎょうせい(2002)
- 4) 国立国語研究所：小学生の言語能力の発達、明治図書(1964)
- 5) 佐藤泰正：速読の科学、講談社(1988)
- 6) 塩澤利雄：多読指導を成功させるために、pp.8-10、現代英語教育7(1994)
- 7) 島緑他：多読の効果を検証する、pp.28-47、京都教育大学附属高等学校研究紀要68(2000)
- 8) 寺西雅子・松浦加寿子：多読指導法の実践とその効果、pp.67-78、くらしき作陽大学・作陽短期大学研究紀要37-1(2004)
- 9) 庭野三省：多読で読解の授業を変える、明治図書(1997)
- 10) 府川源一郎：「黙読」の項、p.379、国語教育辞典、朝倉書店(2001)
- 11) 増田幸雄：読みの速度と読解力の調査、pp.78-81、実践国語16-172(1955)
- 12) 横森昭一郎：授業内多読指導：スターター・レベルの高校生に対する効果、pp.6-11、コミュニケーションと言語教育(SURCLE)2(2000)

(いのうえつぎお inoue@oyama-ct.ac.jp)